

ハーモニー

第 36 号

発行日 平成24年3月24日
財団法人 秋田県民間社会事業福利協会
秋田市旭北栄町1番5号 ☎(018)864-2703
編集発行人 三浦 憲一



折り紙の「千枚ホタテ」。たくさんの人に折り紙へ復興メッセージを呼びかけました。
(大船渡市ボランティアセンター)



ボランティアの方々を送り出す準備をしています。
(大船渡市ボランティアセンター)

一人の思いが
復興への一歩に



川の中のカシキなどを取り除いています。
(大船渡市で。秋田市社会福祉協議会の小玉剛也さん)



側溝をきれいにしています。
(大船渡市で。羽後町社会福祉協議会の小林諭史さん)

今号は、秋田市社会福祉協議会主事の**大川泰典**さんにインタビューしました。



秋田市社会福祉協議会
主事

大川 泰典さん

Q1 東日本大震災後方支援に参加して、感じたことは何ですか。

昨年7月上旬、岩手県大船渡市に行きました。報道等で現地の様子は知っていましたが、実際に自分の目で見てみると想像以上に壮絶な状況でした。それでも初期の頃よりガレキ等も撤去され、大分良くなったことを聞き、地震や津波の恐ろしさを肌で感じました。

しかしながら、現地の方々は被災されて生活も大変な状況にも関わらずとも前向きで、逆に元気をいた

だきました。人間の強さを感じた気がします。私にできることは本当に些細なことでしたが、少しでも復興のために役に立てたなら幸いです。一日も早い復興を願うばかりです。

Q2 勤務して1年経ちましたが、どんな年でしたか？

東日本大震災後方支援もありましたが、共同募金の担当もしており義援金の受付なども行ないました。初めて経験することが多く、また大きな出来事もあり、あっという間で非常に密度の濃い1年でした。

Q3 今年の目標またはどんな年にしたいですか？

仕事ではまだまだ教わるのが多いので、早く一人前になり率先して仕事ができるようがんばりたいと思います。仕事でもプライベートでも、充実した1年にしたいです。

大川さんの上司、常務理事事務局長の**大塚妙子**さんから紹介していただきました。



秋田市社会福祉協議会
常務理事事務局長
大塚 妙子さん

Q1 大川さんの人柄、長所を教えてください。

見た目どおりとても真面目である反面、意外とユニークな面も併せ持つとても前向き志向の新人です。今回の東日本大震災で現地支援した時も、他県の社協職員とすぐ溶け込めて交流の和を自分から広げられるという素晴らしい社協マンの素質を持っています。

Q2 大川さんに期待することは何ですか？

地域行事「土崎の港まつり」に長年参加していて、地域の伝統や人とのつながりをとても大切にしているので、今後の地域福祉活動にも多いに力を発揮してくれるものと期待しています。素直に仕事に取り組む姿勢をいつまでも大事にして一緒がんばっていきましょう。

東日本大震災から1年

私たちは忘れない

ハーモニー第35号に続き、第2弾として、被災地の支援内容をご紹介します。

湧き立つ想いを バスに乗せて

秋田県社会福祉協議会

主査 安田 大樹

「1,611」。これは本会が秋田県災害支援ボランティアセンターとして運行したボランティアバスの参加者、つまり被災地で活動したボランティアの人数で、従来のボランティア募集では考えられない数字です。この数からも県民の被災地復興に馳せる熱い想いが伝わり、深い感銘と頼もしさを覚えたところです。

参加者の多くが口にした言葉、それは「ありがとう」という一見何の変哲もない言葉でした。しかし、本来この言葉は何かをしてもらった方がその相手に対して使う言葉であるはずで

す。ここでは、例えば泥出しをした家の住人の感謝の言葉、喜びの笑顔に触れた時など、つまり被災した方のために役に立てたことを実感した場面に聞かれ、時には涙ながらに連呼するボランティアもいます。これには一言では語りつくせぬ深い想いが込められていますが、まさに人の喜びこそを報酬とするボランティア活動の本質であり人が本来持つ普遍的な心とも言えます。

昨今、地域のつながりは薄れ、かつての支え合いはその姿を失いつつあると言われています。しかし、その心はまだ失われることなく存在し、きっかけさえあれば確かに動くのだということはこのたびの経験を通して確信すると同時に、そのきっかけを導き出すための努力を惜しんではいないと痛切に感じたところです。

現在、被災地では人のつながりづくりが精力的に進められています。それは我々が暮らす地域にも求められていることを忘れてはならないでしょう。



県庁前から「ボランティアバス」が運行されました。



側溝を片付けています。
(岩手県大船渡市)

人間の弱さと人の強さ

由利本荘市社会福祉協議会

大内支所 介護職員 長谷部 悟



震災から8ヶ月が過ぎた11月23日、復興支援活動のため、岩手県釜石市へ行きました。被災地へ行ったのは三回目でしたが、やはり、メディアを通して

見るのとは違い、起きてしまった事の甚大さ、被災された方々の悲惨な状況が、五感を通して伝わってきました。多くの道路は通れるまでに復旧していたものの、手付かずの信号や標識、多くのさら地と、あの日津波に飲まれたそのままの状態の家屋が混在する、異様な光景でした。

作業する家屋を見て、まず思ったのは、『どこから手を付ければ良いのか…』という、絶望的なものでした。割れたガラスや建材、家の中にある全ての物が散乱し、冷蔵庫の中は、あの日以来開けられた形跡は無く、完全に腐敗し、悪臭を放っていました。実働時間は5時間の短い時間でしたが、とても危険な作業であり、デスクワークに慣れてしまった私には、集中力を維持し、安全に行うには、ある意味ギリギリの時間だったかもしれません。

作業を終えたその時には達成感もありましたが帰りのバスの窓から見ると、朝と全く変わらない街の姿を見ると、無力感と不自由の無い自宅へ帰る心苦しさを感えました。道路脇に立てられた、『有り難う！支援に感謝します。』のメッセージに、私達も救われた気がします。

我々『個の力』は、とても小さいものです。今回のこの活動も、ガレキを広域で処理するという計画も、効率としては決して良いものではないでしょう。しかし、その小さな力の結集、継続が必要不可欠であり、復興のスピードを大きく左右するものでしょう。大きな被害を免れた隣人として、痛みを分け合う必要があると考えます。



津波の激しさを物語る被災した家屋。
(岩手県釜石市)

復興と心の支援

湯沢保育会 みたけ保育園

栄養士 長塚 弘子



震災後の約5ヶ月間、休日を利用して岩手県の陸前高田市と大船渡市でのボランティアに参加しました。ボランティアセンターからの指示に従い被災した水産会社や個人宅の片付け、草取り、側溝や道路の片付けなど様々な作業を行ないました。壊滅状態の陸前高田市では県外の方々によりボランティアセンターが運営され、全国

からの支援者を乗せたバスは常に溢れるほどの数でした。

荒涼とした光景を目の前にして被災地の方々の悲しみに触れ、例えようもない気持ちにおそわれる一方で、人々の支援の温かさに幾度も胸が熱くなりました。

陸前高田市には友人がおり、「何かできる事は？」と考えたのが参加のきっかけでした。友人が管理栄養士として勤務する施設は千食以上の食事を提供する避難所となりましたが、「命をつなぐ食事」のおかげで震災に関係する死亡は1件もなかったと言います。壮絶な経験をした友人は地元の方々と共にボランティアに対しての後方支援として、宿泊や食事の提供を続けており、そこを訪れる人々の支援の形

も少しずつ変化しているとのこと。

今回参加して、ひとり一人の支えがあって大きな力が生まれ、今後も支援は必要であるという事を痛感しました。被災地はこれからが本当に復興の始まりです。当たり前の生活を送る私たちにとって、震災が思い出にならないようできる限りの支援を続けていきたいと思っています。



避難所となった特別養護老人ホーム。被災者に食事を提供しました。(H23.4月陸前高田市)

今、自分にできる思い

能代市社会福祉協議会

訪問介護事業所

主任訪問介護員 鈴木 和子



岩手県大船渡市へ物資班として5月27日から4日間ボランティア支援活動に参加しました。大船渡市へ近づくにつれて、車中から見たガレキの山々、津波で壊滅した家屋、工場などの光景に“これが現実なのか”と目を疑いました。

私が行った小学校の体育館には、大手企業や有名タレント、個人からの善意で送られてきたたくさんの衣類や

乳幼児に必要な離乳食、オムツなどが山積に保管されていました。サイズ別の仕分け、賞味期限月日の記入と細かい作業にはかどらず憤りを感じました。それは、行政としての手順に沿う必要があったと思いますが、一刻も早く避難所を回り、必要な物資を待っている人たちへ早く届けてあげたいとの思いがあったからです。

ボランティア活動の最終日は、津波で被災された個人宅の泥の取り除き、後片付けを行ないました。泥まみれになりながらの作業でしたが「負けてたまるか」の精神で、明るく前向きに生きていこうとする被災者の姿に私達も同じ思いで作業に取り組みました。真心と笑顔は誰にでも感じる事ができ

ます。

今後もボランティア活動を通して「人に勇気と希望の灯」を灯す人々が増えることを願っています。そして被災された方が一歩また一歩と前に進むことができるよう、見守り応援していきたいと思



全国から寄せられた善意の物資が体育館に山積み保管されていました。(岩手県大船渡市)

これからできること

秋田県身体障害者福祉協会

手話通訳推進員 保泉 朋子



聴覚障害者の支援のため、秋田から手話通訳者が計15回宮城県に入り、88日間に及ぶ活動をしました。私も約1週間の日程で3回行きました。その中で印象に残っているのは、行方不明者捜索のために自宅が取り壊される方の作業立会の通訳に行った時のことです。1階は津波で消滅していましたが、2階部分は少し傾いている程度で、こ

のまま住めるのでは?と思えるほどきれいな状態でした。その家が重機によって目の前で壊され、洋服や生活用品が家の壁と一緒に泥まみれで積み上げられていく様子を見て、持ち主の方は涙ぐんでいました。「あの服、今度の大会の時に着ようと思っていた」と呟く手を見て、数々の思い出ががれきと化していくのをどんな思いで見つめているのだろうと思い、私も胸が痛みました。そんな中、遠くで「見つかりました」という自衛隊員の叫び声が聞こえ、一斉に作業が中断しました。辺りは静まりかえり、みんなが手を合わせて遺体が運ばれていくのを見守ります。その静けさと目の前に広がっていた現実

今でも忘れることができません。

あれから一年、災害時の様々な課題が明らかになりましたが、私たちは何を变えることができたのでしょうか?被災地に入るボランティアも激減し、人々の記憶も薄らいできています。1年たった今こそ、今後は何が必要なのか、自分にはこれから何ができるのかをもう一度考え、行動しなければならぬのではないかと感じています。



行方不明者捜索のために自宅が取り壊される方の作業立会の通訳に行きました。(宮城県名取市)

栄養士さんの おすすめ料理

雄勝福祉会 愛光園(湯沢市)
柴田 乃里子



「鉄分が多いひじきをどうしたら食べてくれるか」と考え、思いついたコロックです。ひじきの煮物は残される方も「おいしい」と食べてくれます。具材や味付けも色々に応用できます。また、季節の野菜を付合せて楽しんで下さい。



3月3日、食事は利用者に好評のバイキングでした。

ひじき入りコロック

<材料(4人分)>

- じゃがいも 中2個
- 鶏ひき肉 150g
- 玉ねぎ 1/4個
- にんじん 5cm
- 芽ひじき 大さじ1~2杯
- サラダ油 適量
- 薄力粉 適量
- 卵 1個
- パン粉 適量

<作り方>

- 1 ジャがいもは皮をむき芽も取り、乱切りにし、水にさらしておきます。
- 2 玉ねぎ・にんじんはみじん切り、芽ひじきは水で戻しておきます。
- 3 ①を茹で、水気を飛ばし、熱いうちにつぶしておきます。

- 4 サラダ油を熱し、鶏ひき肉を炒め②を加えて塩、コショウをします。
- 5 ③に④を入れ混ぜて、4等分にします。
- 6 ⑤に小麦粉、卵、パン粉の順に付けます。⑦サラダ油で揚げます。付け合わせの野菜を盛り付け完成です。



小さな子供さんからお年寄りの方まで喜ばれる1品です。

プレゼントクイズ

問題

表紙で紹介した社協マン大川泰典さんの勤務先は、〇〇市社会福祉協議会です。〇に当てはまる市名をお答えください。

●応募方法●

専用ハガキにて応募してください。
(福利協会会員のみ対象)

- ◆プレゼント希望コースは必ず記入してください。
- ◆専用ハガキの裏面には、広報の感想や意見など自由にご記入ください。ホームページコラム欄に紹介することがあります。(氏名は公表しません)

●宛先●

〒010-0922 秋田市旭北栄町1-5
秋田県民間社会事業福利協会
「ハーモニー」クイズ係

●締切●

平成24年4月25日(水) 消印分まで有効。
※当選者の発表は、応募締切後に賞品の発送をもちまして代えさせていただきます。

★このプレゼント企画は、福利厚生センターの事業支援を得ているものです。

A コース **比内地鶏わっくんセット**
(ハンバーグ・手羽先黄金煮他)
5名様へ

鹿角苑
TEL 0186-65-2222
〒018-5334 鹿角市十和田毛馬内字古館2-1

B コース **一泊2食付 無料宿泊ご招待**
2組4名様へ

ホテルサンルーラル大湯
TEL 0185-45-3311
〒010-044 大湯村北1-3

C コース **焙煎コーヒーとクッキー詰め合わせ**
20名様へ

ばあとなあ
TEL 0183-72-8107
〒012-0036 湯沢市両神15-1

D コース **いぶり漬けとわさびテトラセット**
20名様へ

(提供) 秋田北空港クラシックゴルフ倶楽部
TEL 0186-72-5511
〒018-4301 北秋田市米内沢字長野沢142
大野台ゴルフ倶楽部
TEL 0186-62-4813
〒018-3333 北秋田市坊沢字根小屋沢48-1

編集 後記

東日本大震災から1年が経ちました。いまだ行方不明者数も多く、また仮設住宅等で避難生活を送る人は34万人といわれています。まだまだ復興に向けての支援は求められ、ニーズも様々だと思います。一人の力は小さいですが、今一度どんな支援があるのか、どんな支援ならできるのか考えてみませんか。「私たちは忘れない」を胸に被災地に、息の長い応援のエールを送り続けたいと思います。(H.K)